

## 加算法評価できるか？

例えば、漢字スキルをしているとき、こんなことはないでしょうか？

教師はいつものように「はみださないようになぞりなさい」と指示します。

そういった後に、期間巡視して子どものスキルを見ていきます。

そのときに、字を書くのが苦手なある子どもがはみ出して書いています。

さあ、みなさんはどうしますか？

こうした場合は、相当にその子のキャラクターによって対応を変えていかなければいけないように思います。

ただ、前提は「字を書くのが苦手なある子ども」ということです。

つまり、本人は相当にがんばっているということでしょう。

がんばっているけれど、はみ出してしまう。

このつらさを教師が理解できるかということです。

総じて、教師は、やろうとすればできるエリートなのです。

やろうと思ってもできない辛さをなかなかわかることができません。

一番ダメなのは、その場でこのようにいうことです。

くん、きちんと書きなさい。

教師の立場からだけものを言う最悪の対応でしょう。

では、私がベストな方法を示せるかということとそうでもないのですが、次のようなことは頭を巡ります。

- ・一緒に書いてあげる。
- ・なぞるところを「赤鉛筆」でなぞってわかりやすくしてあげる。
- ・知らんぷりする。
- ・きちんとできているところを指さして「良くできているね」と声をかける。
- ・隣の子に「すごいねえ、はみ出さないで書いて」と声をかける。

このエピソードはいろいろな問題を含んでいます。

一つは、効果が上がるのはどのような方法か考えるということです。

ある子どもの行動に対して、教師は様々な対応を思いつくでしょう。

しかし、要はその子の行動が変わればいいわけです。

それを、いつでも厳しく叱れば子どもは行動を変えて当然と考えるのは、プロの仕事とは言い難いでしょう。

## 指導には、前提がある

思い当たる節があると思いますが、中高生の時、どんなに正しいことを言っても、どうにも反発しなくなる教師がいなかったでしょうか？

逆に、正しいかどうかわからないけれど、「この先生の言うことなら聴こう」と思える教師はいなかったでしょうか？

教師である私がこうしたことを指摘するのは気が引けますが、確かにそうしたことはあったはずで

先日、知り合いの中学校教師と話していると、「この先生の言うことなら聴いてもいいなあ」という気にさせるところに努力を払うと言っていました。

つまり、簡単に言うと、「心のつながりがない教師から指導されても、効果がない」ということでしょう。

なにも私は、心のつながりのない教師の言うことは聴かなくてもいいといっているわけではありません。

しかし、子どもが素直になれるような教師との関係を子どもたちと作ればいいなあとは思っています。

子どもの現象ではなく、内面に目を向ける。

例えば、頭痛がして病院へ行きます。

医者Aは、「痛み止めを処方しましょう」と言います。

医者Bは、「風邪の症状もないし、どこかにぶつけたと言うこともないようですね。ちょっと原因がわかりません。心配されるのは、頭の中の病気ですが、念のためMRIなど検査等をされますか?」と言いました。

さて、みなさんどちらの医者を信用しますか?

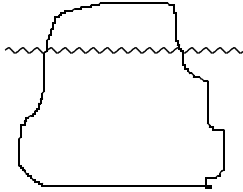
いつも、たいへん姿勢のいい子が、姿勢を崩して座っています。

教師Aは、「姿勢を正しく座りなさい」と言います。

教師Bは、その場で「姿勢を正しく座りなさい」と言った後、休み時間に「どうしたの?いつも姿勢良く座っているのに、今日は珍しいね。」と声をかけた。

どちらがプロの仕事だろうか?

左のような図でよく説明されるが、水上に出ている部分は、子どもの現象面です。



一方、水面下は、子どもの隠れた内面、あるいは現象の原因です。

力のない教師はいつも現象にだけ振り回されます。

男子がもめてる 仲良くしなさい と指導する。

勉強に身の入らない子がいる 一生懸命やりなさい と指導する。

いつも、表面だけの現象を追いかけて指導します。

時がたつにつれ、学級は落ち着くどころか、問題は次々に起こります。

こういう指導をモグラたたきの指導といいます。

何か問題が起きたときには、常にその問題がなぜ起きているのかを考えなければいけないのです。

つねに、「なぜ」と考える。

「男子がもめている」その根本原因は何なのか?

「勉強に身の入らない子がいる」その根本原因は何なのか?

しかし、気をつけなければいけないのは、「なぜ」と教師は考えるのです。

「なぜ」と子どもを問いつめるものではありません。

「なぜ、こんなことをしてしまったの?」

こう問いつめるものではありません。

.....いくつもの生徒指導上の「痛い」経験から学んだことを書かせていただきました。

「みんな違って、みんないい」か?

金子みすゞの詩が数年前ブームになりました。

折しも、指導要領には「個性の重視」がうたわれました。

個性の時代ともいわれました。

最近に至っては、「ナンバー1になれなくてもオンリー1」でいいそうです。

そりゃあ、そうです。

でも、ナンバーワンに挑戦しなくても言い訳じゃないはずですよ。

この言葉には、努力すること、がんばることさえも否定する危険なニュアンスを私は感じます。

しかも、このフレーズにはすり替えがあります。

というのは、ナンバーワンとオンリーワンは同じカテゴリーの言葉ではないと思うのです。

本来、ナンバーワンは「目標」で、オンリーワンはその「目標」への「向かい方」を言うはずですよ。

つまり、みんな一流を目指す、しかしその努力の仕方は人それぞれであっていいということでしょう。

はなから、「この程度でいいや」と思う人は、ろくなもんじゃありません。

あわせて、「オンリー1」=「常識はずれ」ではないはずですよ。

個性とは、常識の上に成り立つものです。

常識を伴わない個性は、悪癖という

野口芳宏先生の言葉です。

いつも、この言葉には反省させられます。